

# 運用プロセス記述と運用自動化

2008年6月作成

## 概要

近年、ITシステムが大規模・複雑化するに伴って運用管理作業も複雑となり、人為ミスによる障害が問題になっています。主な原因としては、運用プロセスが曖昧で属人的なために、重要なノウハウが特定の担当者だけに蓄積され、組織として継承・活用されていないことが挙げられます。

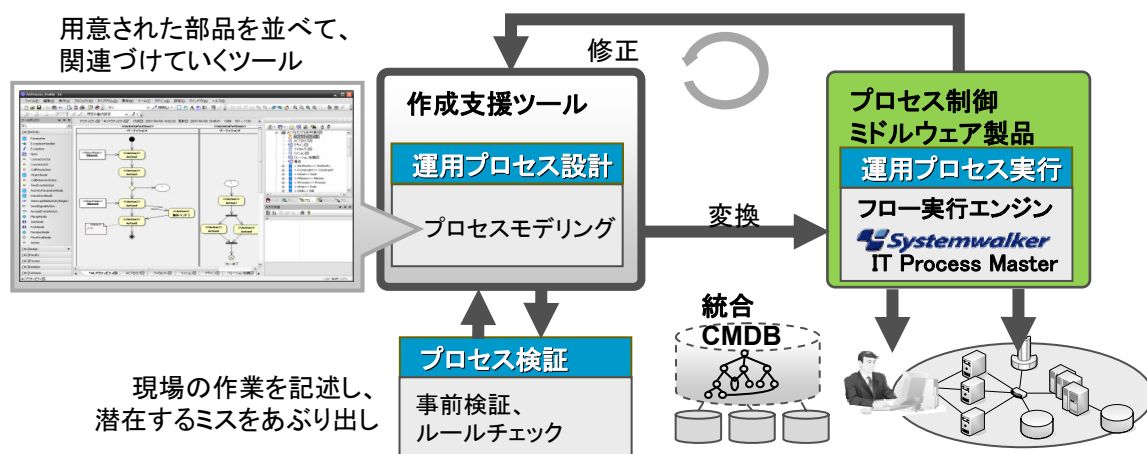
富士通研究所では、「運用プロセスの見える化」として、手順／作業項目／体制といった運用プロセスの多様な情報を曖昧さなく相互に関係付けながら記述する「運用プロセス記述形式」を確立し、さらに、作成・検証支援ツールの開発によって、人手では手間がかかるプロセス記述の作成や記述ミスの検証を容易にしました。ワークフロー製品により、作成した運用プロセスを自動的に実行することができます。

## 技術のポイント

- UMLベースの形式的な記述(運用プロセスの見える化)**  
 複雑な運用プロセスをUMLベースで四つの側面(プロセス図(プロセスの全体構造)、ミッション図(作業目標や運用時制約)、ファカルティ図(組織構造や実施者)、アクティビティ図(作業の具体的な手順))に整理することによって、作業の把握・検証を容易にします。
- 作成・検証支援ツール(プロセスエディタ)**  
 パレットから部品を選択したり、作図に必要な情報(組織情報など)を外部から取り込みながら、多様な要素(個別作業、判断分岐、分岐／合流、組織図、運用時制約)からなるプロセス記述をすばやく容易に作成します。また、編集集中に記述ミスを指摘したり、外部の高度な検証エンジンと連携することによって、ミスの訂正を支援します。

## 適用例

- ITIL (IT Infrastructure Library) ベースの運用作業手順の設計・実践  
 あらかじめ用意してある作業手順テンプレートを作成支援ツールで開き、現場ごとの個別要件を追加していくことで、ITILベースの運用作業手順をすばやく確実に設計することができます。
- ワークフロー製品での実行  
 作成した運用プロセス記述をワークフロー製品の実行可能な形式に変換して実行することで、設計から実践までを支援します。



プロセス記述と作成支援ツール